

愛知県の公立高校入試制度改革について

2012.7.27
共立総合研究所 江口忍

1. 改革の方向性

- ① 自分が輝ける学校を母校に …… 生徒の**自由な学校選択を尊重**し、不本意入学や帰属意識の低い生徒を減らす
～ 各高校が特色を打ち出すことで**大学進学実績以外の要素で評価される“輝ける学校”づくり**を進め、生徒自身も自らが輝ける高校を自由に選択できる入試制度を目指す
- ② 互いが伸び合い、高めあう中学生生活を …… **「もの言わぬ中学生」を生まない**
～ 中学において「自ら考え、発言し、行動できる」環境を作ることで、自己の確立に重要な中学時代を**内申のために先生や周囲の顔色を窺うようなことがないようにする**
- ③ 選抜制度として公平性に対する信頼向上 …… 絶対評価の下での**内申点重視の選抜は公平性を欠く**
～ 中学毎に学力レベルや評価方法に違いがある内申点を重視することは、公平性を重視すべき入試選抜制度として適切なものか。平素の努力等を評価する上で内申点評価に一定の意義はあるが、入試の公平性を重視する立場から**合否判定での内申点ウエイトは引き下げる**か学校による評点の甘辛を調整するべきでは
- ④ 全国・世界から教育環境で選ばれる愛知に …… 「世界と闘う愛知」を実現するための教育環境の構築
～ 外から人材を呼び込むには関東、関西に負けない**「スーパー進学校」は大都市の教育インフラとして必要不可欠**
- ⑤ 県内のどこに住んでも一定の大学進学環境を提供 …… **「進学校空白域」における進学重点校の設置**
～ 複合選抜導入を契機に名古屋市から郡部へ進学校の分散が図られたが、一方で名古屋市南西部から津島市、旧海部郡一帯に大きな**「進学校空白域」**が出現。ある程度の人口密度のある地域では、徒歩・自転車や短い公共交通機関の利用で進学校に通えるようにして、意欲があれば**居住地や所得に関係なく難関大学への進学を目指せるような進学環境を整える**

2. 改革の論点

公立高校入試制度改革としては、**(A) 複合選抜制度**、**(B) 内申点の取り扱い**、の2点が主な論点となる
(前掲1⑤に関しては入試制度での対応は困難であることから議論を分ける必要あり…後掲5参照)

「複合選抜制度」と「内申点の取り扱い」に関する現行制度の評価

(A) 複合選抜制度		(B) 内申点の取り扱い	
現行制度の概要	<ul style="list-style-type: none"> ・尾張学区と三河学区の高校をそれぞれ1群、2群に分け、さらに各群をAグループ、Bグループに2分することで各学区の高校を4つに分割(一部両グループの共通校あり)。第2志望は第1志望と同一群の別グループからしか選択できない。合格発表は両グループ同時に行う。 	現行制度の概要	<ul style="list-style-type: none"> ・当日点100点(5教科×各20点)に対して内申点90点(45点満点×2)を基本に、ここから当日点を1.5倍、または内申点を1.5倍する計3パターンの中から各高校が一つを選択。ただし「当日点重視型」でも当日点150点:内申点90点(総得点に占める内申点ウエイト37.5%)と、合否判定で内申点が相当大きなウエイトを占めている。
現行制度の評価	<div style="background-color: #fff9c4; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> <p style="text-align: center;">プラス面</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校群時代と違い、合格さえすれば第1志望の高校へ確実に入学できる。 ・一般入試の受験機会が2回ある点は生徒や保護者から総じて高評価。 ・それぞれの群・グループ内で学校の序列化はあるが、トップ進学校が分散することで名古屋市内と尾張郡部や三河地方との学校格差は非常に小さい。 </div> <div style="background-color: #bbdefb; padding: 5px;"> <p style="text-align: center;">マイナス面</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第1志望は自由に選べるものの、第2志望の選択肢が普通科全体の約4分の1の狭まるため行きたい学校を見つけにくい。その結果第2志望では不本意入学や遠距離通学が増加。 ・学力は高いものの志望意欲の劣る第2志望受験生が、学力は劣るものの志望意欲の高い第1志望受験生を押しつけて合格する「玉突き現象」が発生。 </div>	現行制度の評価	<div style="background-color: #fff9c4; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> <p style="text-align: center;">プラス面</p> <ul style="list-style-type: none"> ・内申点のウエイトを高くすることで中学での平素の努力を評価できる(特に入試科目にない副教科)。 ・内申点が入試での「持ち点」になるため、業者テストに全面的に頼ることなく中学での進路指導が可能。 ・中学校の円滑な学校運営・授業運営にはプラス。 </div> <div style="background-color: #bbdefb; padding: 5px;"> <p style="text-align: center;">マイナス面</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いわゆる「内申点稼ぎ」のために中学校生活が窮屈になる土壌を生んでいる(「もの言わぬ中学生」の増加につながっているとの指摘)。 ・中学毎に学力レベル差(≒地域差)や評点の付け方(=5段階の分布)の差が大きいため、受験生や保護者に不公平感がある。 </div>

3. 1, 2を踏まえての入試制度改革「私案」

	現行制度	私案	狙い
一般入試の受験機会	・2回 (Aグループ/Bグループ)	・2回 (前期/後期) ・前期、後期の募集人員は各高校が9:1～1:9の範囲で自由に決定	複数受験の機会を望む生徒保護者への配慮、高校の特色付け強化、全国トップクラスの進学校を作る
学区	尾張学区と三河学区に2分	全県を1学区に統合	尾張と三河の「見えない壁」を崩す
群・グループ分け	各学区を1群、2群に分け、さらに各群をAグループ、Bグループに2分。原則として同一群の異なるグループから受験校を1校ずつ選択(第2志望はなくても可)	全廃(前期後期同一校の受験も可)	学校選択の幅を大きく拡げて第2志望でも納得して進学できるようにする→志望意欲を持った生徒が集まることで高校の特色付けにつながる
当日点:内申点の比率	I型(原則) … 100 : 90 II型(内申重視型) … 100 : 135 (内申点を1.5倍) III型(当日点重視型) … 150 : 90 (当日点を1.5倍) 全体に占める内申点のウエイト: I型47.4%(普通科中位と専門科)、II型57.4%(普通科下位と専門科)、III型37.5%(進学校上位のほとんど)	前期:各高校が自由に決定(10:0も0:10も可。副教科のみを評価したりSSHで理科や数学の評価を引き上げたりすることも可) 後期:総得点に占める内申点のウエイトが3割を下回らない範囲で各高校が自由に決定 ・仮に内申点のウエイトを一定以上に保つならば千葉県のような学校間調整を行うことを検討	中学校の学力レベルや学校毎の内申点の付け方(評点の甘辛)による不公平排除 内申点のウエイトを高校が自由に設定できるようにすることで高校の特色付けがしやすくなるとともに、高校が求める入学者を入学させやすくなる(例・極端に内申重視にすれば副教科を含めて万遍なく努力をして学校の指導に従う生徒を入れやすくなる)
推薦入試	学力推薦、人物推薦、環境推薦の3種類	人物推薦、環境推薦のみとし、学力推薦は廃止	一般試験があれば学力推薦は意義が乏しい

【当日点:内申点の比率に関する補足】

現行制度における校内順位の決定方式

ア 受験者を「A」及び「B」に分ける。

(ア) 調査書の「学習の記録」の評定得点の累積人数及び学力検査合計得点の累積人数がともに各高等学校の定める基準人数内にある者について、その他の入学者選抜の資料を総合的に判断した上で、この者を「A」とする。

(イ) 上記「A」に属さない全ての受験者を「B」とする。

イ 校内順位の決定は、「A」、「B」の順序で行う。

ウ 「B」における順位の決定については、各高等学校があらかじめ選択したI型、II型、III型のいずれかの方式によって得られた数値を基礎資料とした上で、総合的に行うものとする。

4. 本私案で検討すべき問題点と課題

① 学校の序列が明確化

… 業者テスト等によって現在よりさらに高校の序列化が進む可能性

- 学力による高校の序列は現在でも存在するが、現在より拡大することを是とするかどうかは判断の分かれるところ。この点は入試制度のあり方に決定的な影響を与えることから、**序列化の是非は入試制度改革の議論の最初に議論しておくべき**

② 中学の進路指導への影響

… 特に当日点重視が予想される進学校の前期試験では内申点を目安にできない

- かつての「中統テスト」のような全県的な**業者テストへのニーズが高まる**。中学の進路指導で業者テスト的な物差しがどうしても必要なら、埼玉、山梨、岩手などで行われている「校長会テスト」のような仕組みを作るのも手。ただ、文科省による中学校での業者テスト廃止指導(H5年)は生徒に「業者テストの点数で志望をあきらめさせない」のが大きな目的であり、中学校は(特に第1志望については)**業者テストの結果にかかわらず生徒の意志を尊重するのが原則**。ただ内申重視の後期試験は内申点と校内実力テスト等のデータで中学校が有効な進路指導を行うことは可能(これらの点は現状と大差なし)

③ 前期不合格の心理的負担

… 受験生や保護者にとって前期「不合格」は大きなプレッシャー

- 確かに不合格になれば生徒や保護者にとって大きなプレッシャーだが、**複数回の受験可能な県では当然起こること**。この点がどうしても問題ならば現在のように「複数回受験・一斉合格発表」とすることも可能

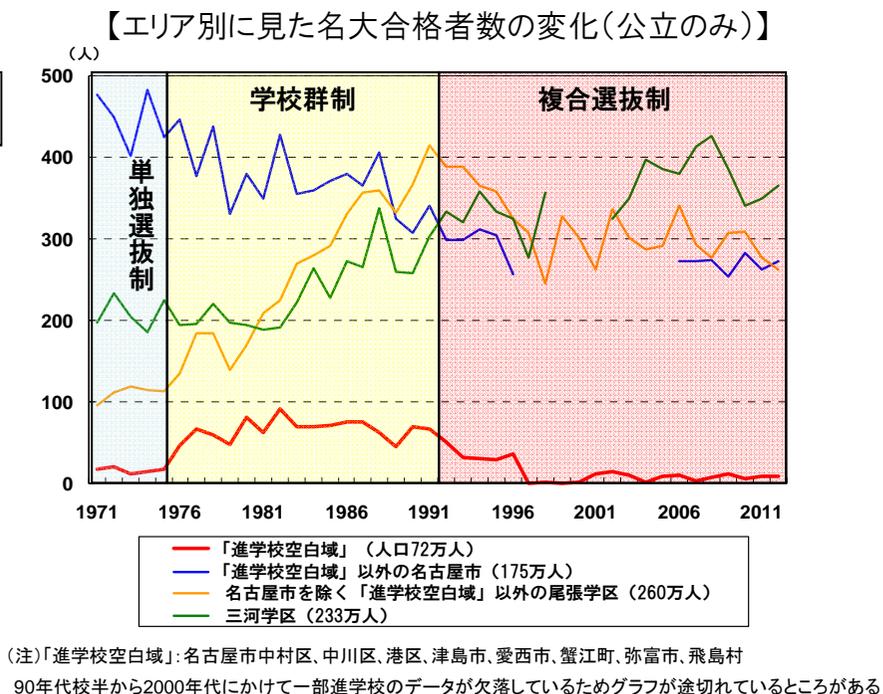
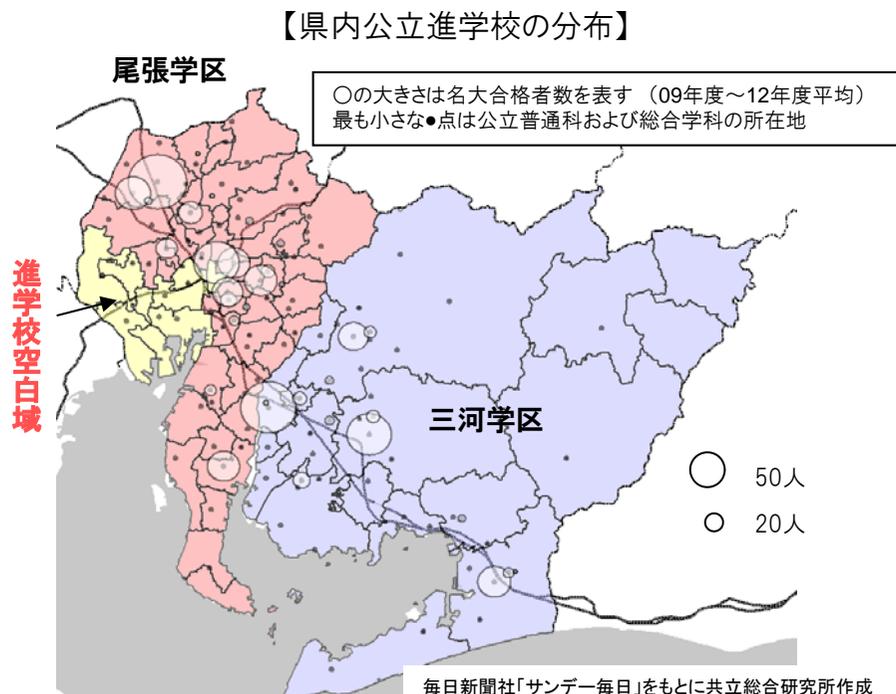
④ 学校運営への影響

… 内申ウエイトの引き下げで副教科を中心に授業運営への影響が懸念される

- **後期試験を内申重視とすれば内申を捨てることは困難**。特に難易度が中～下位の高校では合否判定における内申ウエイトを高めにするともみられるため、内申という“縛り”が効かなくなることで中学校での授業運営等に支障が出るといった事態が起こることは考えにくい

5. 入試制度以外に検討すべき事項～「進学校空白域」の解消(前掲1⑤に関連)

下の地図のように、現在名古屋市南西部から旧海部郡南部や津島市にかけて大きな「進学校空白域」が存在する。こうした空白域は単独選抜制の時代にも見られたが、学校群制度に変わってこのエリアにある高校の大学進学実績は大幅に向上した。ところが複合選抜制度になると再び低下し、現在は単独選抜時代よりもさらに悪い状況となっている(右下グラフを参照)。



進学校空白域に住んでいても公共交通機関を利用すれば名古屋市東部などの進学校に通うことは可能。しかし、同じ愛知県の都市部でありながら、自転車や短距離の公共交通機関で通学できる範囲に全く進学校がない状。況は改善すべき … **進学校のない地域には人口が流入しない** → **地域格差拡大の要因に**

ただし入試制度で進学校の偏在を是正しようとするれば、かつての学校群制度のように生徒の志望を制約を制度になってしまう → **進学校空白域に「進学重点校」を置く**ことで改善は可能

「進学重点校」のイメージ… 東大や国公立医学部を含むあらゆる大学への進学可能性を持てるレベル
具体的には**名大に毎年20名前後、東大に数年に1人合格**(=名古屋市内で言えば**瑞陵、桜台レベル**)